

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

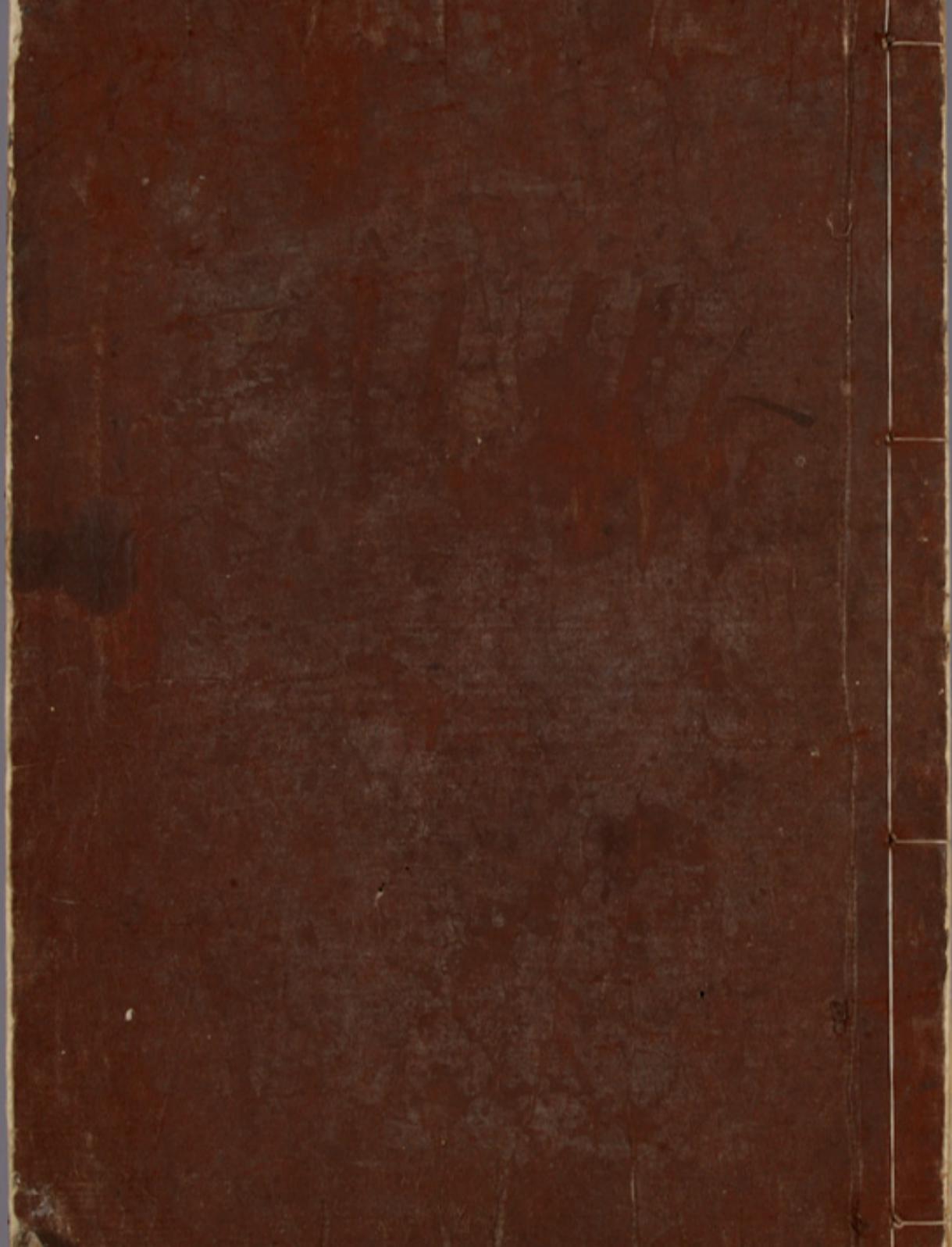
PDF issue: 2024-12-14

石狩日誌

松浦, 武四郎

(発行年 / Year)

1860



東西嶺表山川
地理瓦調記行

石狩日誌

多丸志樓蔵板

凡例

蝦夷の地石狩川の巨大な谷を穿ちて流るる所こそ源石狩岳なりや
去海を二百里餘を舟車とも足跡の興へて半面をものかへるは
況や源をよ文化度問ふ事神交（注）もさき三千年余を少く
サンゲロマナイも別て物も是潤潤（注）と来和人杖を曳くは始とて後五
年来は身ごとく茲安政丙辰の夏余が十一年申を溯りウリウお路を
取て西岸ルモツペ小越る翌丁巳の春函館府に表
命に源を探り岳を攀て山流水脉を審し歸り石狩志七巻を
著す納むる愛と大に採掲して一巻を同好の士の卧持小供に
依て文の疎漏あへんぞ敢て薄視行あふりたり

と築造を行ふんと欲するは原稿七冊と関し、山川地理樹木
鳥鳥と陸は物産戸口人少人情地名の和譯とあるものなり
番延紀文前申の立札は江戸下迄形を及ぼる養蠶豆腐
破窓の下
源の弘志の序

山

丁石將日誌

伴敬 松浦竹四郎源弘著

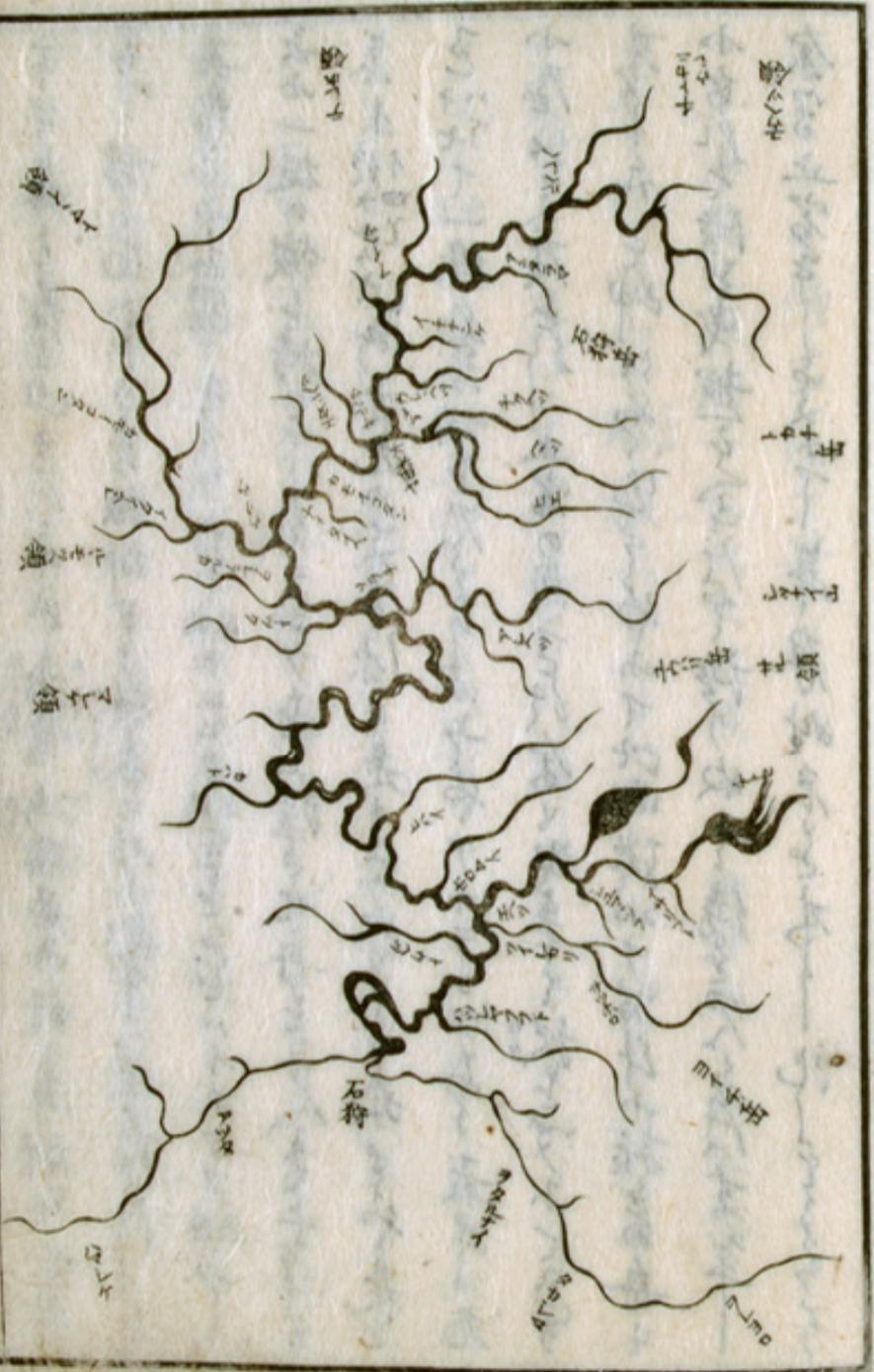


安政丁巳四月念五日大塚来^{イヌガ}と函館港と發し大井村小宿まで
忍^{シロコウ}杉内越^{シナイ}西花スツ、小出此者又より大塚氏に分^{ワカレ}袖余^{イッヤ}磯^{イソ}たの^{タノ}研^{ケン}
五月朔の快晴刻本船を承て主人スイドサケヌカルと和く或人を
雇てシリベツ川小瀬を舟汁満漲水勢起波濤とて中終ナ申あり
終ふ^{ハヤシ}志^シと^ト遂^{ツグ}と^ト二日は夜に帰る渡りも小屋小宿あり
三日稗^{ハヤシ}明^{メイ}越^ト雷^{ライ}電^{デン}岳^ト到^ト岩^{イワ}内^{ノウチ}を^ヲ来^キセ^セン^ケを^ヲ呼^ヨソ^ソウ^ウツ^ツケ^ケを^ヲ發^{ハツ}ス
四日早雇主人と名山小入里夜イクレニケルベレバお宿者

石將日誌

二

トウブト 地名なりの方、南川 トマ、タイ 地名 ときと夕方洋石橋番を去るを トウブト
 此所漁屋敷控らしたる美焼矢以依て乙名ルヒヤシケの家に着け
 先丙午の年らう一面の識有去長再令一と度此處を去る原大よ
 収ひ麻肉鮮魚等以て餐一翌朝芝賢一升を我に饋之
 十三日曉天破席を以て帆に換りたるエベツフト トウブト 是南川
 舟三番の支流なりと云ふ五甲ありてニッ素を去るをシコツ左ウニウバリ川
 すしりしをシコツと云ふ 報を及千歳會所 えと云ウフツふゆら
 此處越て予地揚柳 赤揚 白揚 秦皮 榆らね 檜木 只 トウブト
 七未んを針位と云ふ 丑宮に向ふなりヲタルナイ岳と云ふ 福にん
 カバトと鶴首 トウブト 所ありホルムイ トウブト 才十番は支流源を



石狩川記
不在日誌
四

ユウハリ岳より登るにまじくゆき老鷹ワケヒス鳩カクツ鳥カクツ共外行くと再馴ぬ小鳥
 多く啼く面ふらふらホウキ扱柳ハシのゆきハシ船中へ吹落さるるを
 其息を志園シエンをきりヲカバイカバイ地チボロヒリボロヒリ地チ字ジをさるビバイ又タフタフ地チか
 ぶ一挺の銃を持せりアイランケを上陸させ舟を三人まで上せり
 ビバイビバイ地チ字ジは所赤丸の支隊源と是もユウバリユウバリより来りや足と
 色ハヒヒ一縷の紫烟をたふりややアイランケあり最年一丸
 小屋は又度とあり止宿の用意は余も罷りてと訊コトをす不し用
 ありし所と岬江ゆきやあり此所終ハナ方斗お振ぬ舟は
 小舟れと陸と曳越とくまなや語りぬし傍をたふり去年
 余等止宿をすや又より年月姓名を本一記キをす

依てすこし侍ふ一絶を筆に

江邊草作褥一夜枕東流暖々水禽叫悠悠々動容愁

十四日未日晴山を驟シラカ融水勢シラカいそげ漲シラカくお人等も餘程苦辛
 東岸トシまき西岸トシと共運流のうた掉シラカさシラカしシラカレベツフトサ
 ツビナイツビナイ地チ字ジ等同じく平地をさるシラカウラシナイウラシナイ地チ字ジを此所
 去年をさるシラカトクトク一軒有るを七年を拓慶を依て川原の宿に
 トミハセを山小入り一匹の狐キツネを獲て歸るニホウシテを虫を糸イト繫き鉤カギを
 用ひユフシてユフシ批ヒをヒ終ヒ時ヒにヒ數十尾得月下一場を俣ヒてヒ臥ヒを
 朗晴三兩日雪解添春漲東岸又西岸蓬庭夢一場
 十五日遊る出船をトミハセトミハセ人セツカウシセツカウシ兩人を己の家へ己の家ヒヒをヒ差ヒ入ヒ

るのを以て一色不白精くけり
 キナウレナイ チヤレナイ等々
 所々端の有るもふは取替く
 ハツとソラチフト ワラシナ あり此
 川才ニ此支流をり保とトカチ岳
 来りるをハセトツクフト是才六
 又保しるもや小人船を叩くと
 黒唇一人甚難の中より眺め
 仰りぬ其乃内文席と云き
 は見余を纏きり依て是等ト三



山如畫人
 如鬼如料
 一葉秋冬能
 前幕無言
 且避瘴氣
 補
 栂陰五小栂動

ハセイタハウレの家を言りセツカウレ
 家着一回乃老煙料針糸火
 字をく張りむ妻の余不各葱一輪
 叫と干銚と文態の油を茶をゆ
 家の傍不狸豆 イシケン 粟 マシ 糠粟 マシ 稗
 等を作是皆黒唇の業行り
 必彼字未銚を不持ま運
 上屋らりも彼方へ農業を教
 禁えらる所不決く後々
 必依て鍼に横不柄を附用



五信子

石巻日記
石巻日記

日数経て突匠は里に来てんははこもこもぬきまの常

ナ上東雲以下出船を朝風朝に陸處をこれや一垂揚を新川に
水掉をる船妻のつり髪を柳の糸をそそがひく朝風

雪口吹く急きりつらこラレラルカフト少物も此川赤七の支流は柳
源をマレケは暖より来るとも也過てウリウフト折トク是亦一の支流に
あ上テレホの西より南より一是より本川小舟のホライビタ
ラは所を柳葉舟替りて風流を流し此は又小舟舟四艘小舟人等
三舟多人来り我より先へ出立をて追附をり依て是より乙名之ヲ
一人を呼増しと柳を切りて正暮夫ベツバラ小舟ぬけ所人等二軒
し名エリシツ此乙名と我去年ルモツベ越へて去り者也うわ切ナ夫
小使インラム

ウリウカモイコタンホ
重とやうの種数なり

廉蹄草の類

上川メモホ多
四五月に花盛なり



南溪
寫

昨馬州

ナンバンキセルと云ふ
上川イチナンケホ多

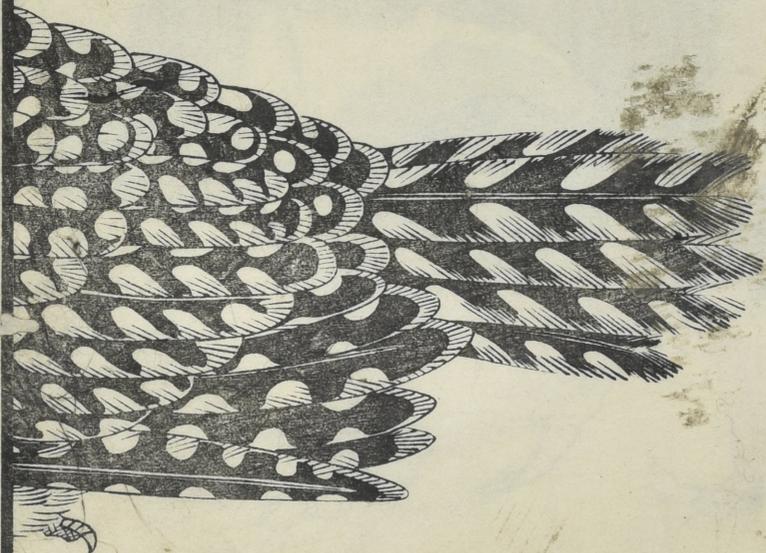
石巻日記

石狩方言

ヲユ、ケ 燕ヶ坂夷地山深き川
喜任曰 日先まて トウカラレヨ
とつ小ま、ママセシとも玄山
一様く舟小舟をさし
手傳ま嘴とポンく
町くおふまらり



讀書齋主人寫照



シリベツ石狩方言

キサラウレチカフ 主役歌の
毛々耳の如くアガリ〜
そのう花時を灰白アガリ
又毛を羽毛は斑
クスリヨ〜
か〜

喜任曰
花斑鳥



十八日早辰出遊は去入るの四や水とて激しむ先より池をこ一
 同は去入不極遂一余とクウチシコロとまきて新巖を攀巨石と
 飛る之怪息を創歎一この名區とらんわらしたホロレブレベとらんを
 西岸より川中へ降りてまふ一つの淵を穿て登るにホロレマとて及
 ちまよ水中心にひらけ烏帽子の如き突出ルホシレブレベと前河津
 まで岩感きし所へ降りてホシノミシタルマイ ホロミシタルマイ等のまう石
 を平た挺あしるる柳子花と云ぬを処方のラナエルと云ふ所の方
 左のうす大岩の上へ上り去入るま下の湯をく深潭お指徳と云ふ所
 外りと傍へ鬼の足跡と云て凡三圍斗の井の如き穴三つを深き穴と云ふ
 一文條又溪に五つあるをこてエモレケレと云て山霊鬼をわんやと云ふ

又先を切河一所と云サヌレベリと云へ兩岸へ愈狭くす其上
 水渦をまわりテツレラナイとて南岸へ一條の飛泉とテツレ
 とと水底へ柵と注の如く一とて石垣松のおもテツレと深き
 ルイカウレとて昔一石橋あり由は傳ふることハルレナイといふ
 あり怪レキウレバハ女下此所をさし一處へ入ると丸木形も五六艘位
 あり此のこカモイコタンと云あり是より又舟をよこしとて支度する傍の石面を記しを
 水聲耳既慣眠到東方白雲晴日三竿起来先漱石
 残山又剩水危棧蜀中同歴く記奇景筆凡慙技翁
 山水両奇絶神剎與鬼二者來皆破膽造化巧無窮
 嵩躡水愈怒吼く恰如雷属目皆堪記愧無華客才

石橋雨後
石在



弁皮衣
殿足
魚肉念
資量
在此山

神庭の園
多石を掃き
舎江

河裏
長存太
古風

木堂
[Seal]



石橋雨後

水底とみみくもる大石清厚く水急く崖樹枝葉あふり
根を流きまよひ嶮崖を白束と乱りやく或は布と瀑せり
怪むらぬるあ條をへんケアソナイアソナー等とたは方ニツイ
レバとらぬ数丈の巨岩の中一おたりとて人等と此所を
削て途中のあを利るアソナイフライとて突あつる大岩を流り
碎ては傍を道なきカモイ子トバケとて七八丈の巨岩に鬼は
舂ぬき物崎立に流さぬ急流に二人と樹の根岩角お
とらぬ強くと曳三人の水筒を突張るを坂と汲けり辛苦
きくやん大弾指の油をとりて毒チ有を信ぜりて危き事
程度及べりレイコロブイラとも同き急激くとレフサラ子ブと云

と彼鬼神の操へあり一著凌葉具母をカモイ子トバケに化不
行くとあつて鬼神と種々の縁故も有りて人等他おぼろしと禁をり
とやるとラコツナイイヌシナイ等あつた流りエタンへツブト此流に
耳をよびて流流をゆりて先にあつた流りぬるにチカブニとて小山は
麓より一帯を人等とたぬれりて流りぬるにチカブニとて小山は
流りぬるにチカブニとて流りぬるにチカブニとて流りぬるにチカブニとて

繫艇垂揚畔罪微暮靄浮蓬窓苦蚊齧半夜泛中流

十九日子解解あつてキニクレベツサラベツ字をもとてチクマツブト一著
此所番屋一棟あり先一同の安を祝し船舟をゆりて流りぬるにチカブニと
定め上川住のキ人等と一帯お煙を一抱りぬるにチカブニとて流りぬるにチカブニとて

六千余支の者あり手拭一函と共

舟日曇天竺梅の浮き圓曆舟入梅舟及少列の此地幸儀修

女二の船一クレーチンコロ タヨトイ シリコツ子 トミバセ等と連て

チクベツの船一ベツチウシ小列の此所へ人及少船 シリコツ子 バカキラ クシタク イソテク タレカ

一と五ふたへは是より左流舟を舟と云ふる内ひり依て爰舟を

並川筋より陸より陸地箸筆鬱葱とて是より酢辛筆舟を

船一午後を路お出り是より舟りけり夕方岳の麓

獲りて宿及しり狸ヌル正と獲たり 七のつとに 七のほと

女二の船一堅重の舟を舟りて大船と云ふ四と舟を舟りて西

の方眺見せん方行 是より岳の麓依り西南に向ひ夕方ベツの

川筋お出り樹木を舟り 是方お宿を感ふ爰夜お寐

女二の月夜舟を出足はケンセウと云ふ舟りて舟りて舟りて

各番度四と云ふの禁舟を爰まで回返りて山を後りて冷風燃

黒烟天を利と云ふ舟りて舟人の云ふベツと云ふ舟りて浦お出り

舟水お酸味お出り舟りて岳嶺より舟新依りて舟りて舟りて

舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて

舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて

川の東岸依り舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて

舟五の舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて

舟水と水お押依り舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて舟りて

石料
不様

びるをききて捕らへんをいふてウエン
 ギウバ北又サウシベ同キンクシベツ同字此
 所丸人家ニ軒有又須更又
 してアサカラ爰も人家此有
 百五年有りニホウテアイランケ留の
 あり供よ出送ひぬ余ニ蕎麦及葉貝
 母の園子と乳羊根を煮きを也
 飯卯とははは是も小人の砂糖也と
 云て一笑一同の老者振舞す
 延胡索 アンラコロを一袋并の



種ありも異なりしてウエンベツに宿を此所人亦五軒 コマヲチユウコエキ
 エナラアニ 此所へビ、の主人も呼ゆ上りおもておもてをしぬ
 蓬窓山色曉乱柵水竿流烟飲朝暾上處々聽鶉鳩
 女ハ日朝霧濛々上陸々南岸を眺みた十甲四面も思ふ曠野もて
 茅茨款々虎杖杖とれもをあり其方にお條の川と雜り目お障らん
 去く石嶺岳と藤を一眸にカ後をおもても此方後牙や其所の所成
 使りてもおもても満ち方満ひらぬ主人と是もとドンブリくてもまま
 行に其言はは風をあめりしとも晒さるりと故と主人人は法をもも
 風呂の事外の事上をあめり中の掃除ももを務めんと入
 ちの病氣もも温泉にも浴もも也必し衣履と履すと著り供

石料
不様

石料
石料
石料

山蹊與水涯原野又林樾晨發認熊蹤暮天投狐窟

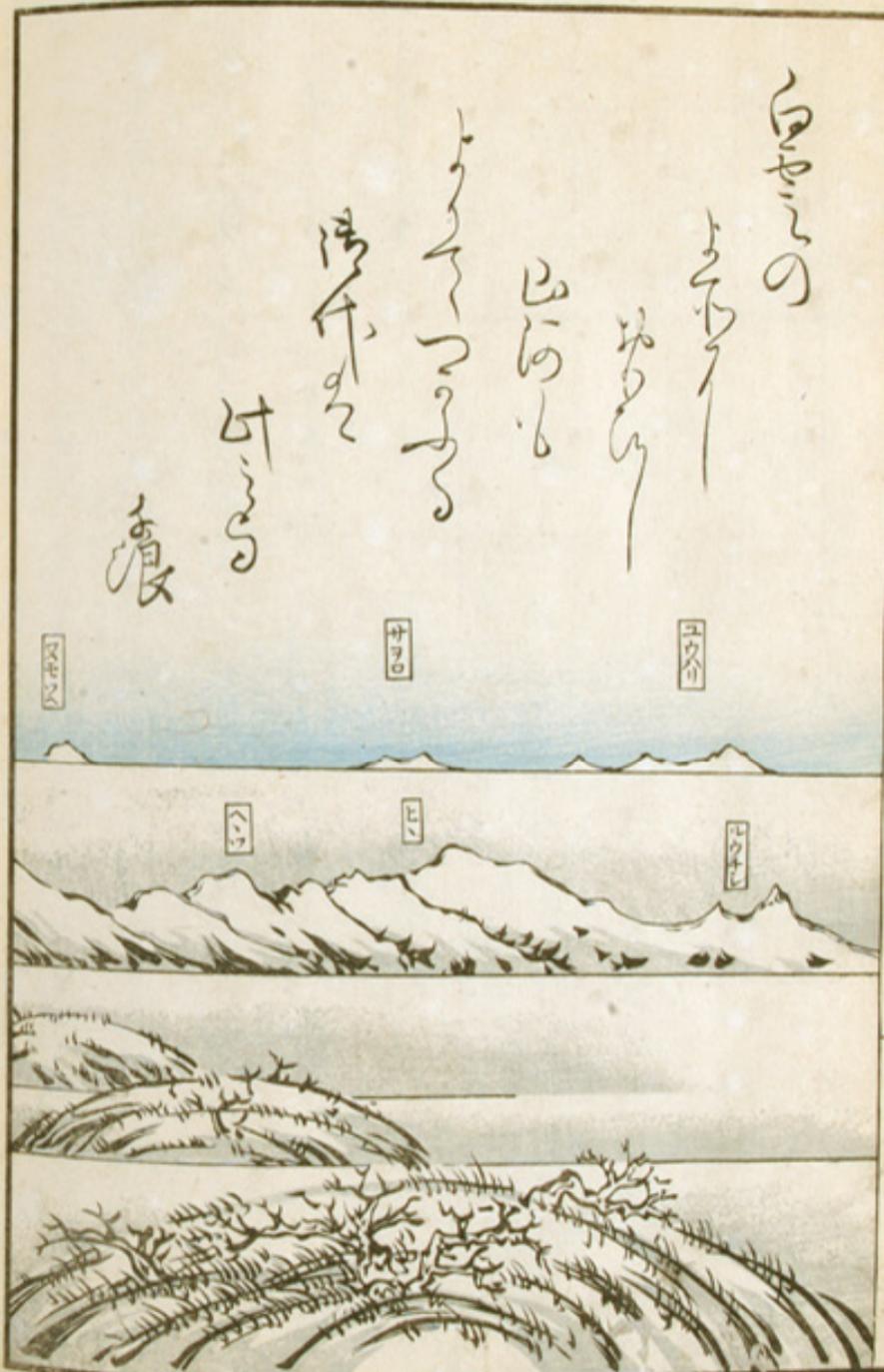
昨日起嗽湯沸水烟滿洞咫尺不無安不異域之趣有奇也昨日之險危
亦被勞レハレトシレハ川涯の險人々を促レハ川岸を互レ岸絶壁のふ
く上レ新レ山又是レり魚鱗惡レ老樹折倒箸滑レくレ踏レおれり
け所レは石口弓矢と鐵レ一囊の末レを携レへレ一レ所レ不レ可レ也此所レより
互レされレと云レた余も再レ警レ特レ然レ也レ如レ酸レ辛レと嘗レて汝レの體レもレハ
國家レ為レたレ稻レ米レハ此レをレたレ兩岸レと峨レ々レもレ不レ可レ也及レ漢レ侯
舟中レと云レた者レハ此レにレはレ皆レさレるレ末レ也又レ一時レ舟レをレ山レとレ此レ所レ舟レ
まレをレ舟レ丑寅レのレ方レにレテレ石レのレ巔レとレ人レ寅レ舟レヲレチレトレガレニレウレシレ知レ少レいレとレ
眺レみレぬレ又レりレとレ須レ更レとレ雨レ者レハレ入レりレるレノレ半レ時レ舟レをレ小レ川レニレテレ所レと

るレことレアンレダレラレマレ地レのレまレ不レ出レるレ喬レ木レをレ倒レくレ橋レとレ行レ當レるレ越レ此レ所レ獻レ春レ菜
胡レ荳レ草レ旱レ藕レ等レ也レ又レ如レ石レ楠レ花レ一レ面レ不レさレるレりレ長レるレ土レ人レとレ是レを
茶レのレ代レ亦レ煎レくレ吞レりレ香レ氣レ亦レ佳レくレ又レ一時レ舟レ樹レ立レのレ山レをレ重レ路レはレ便レりレハ
下レりレソレヨレマレナイレ地レとレ云レたレ知レ此レ川レ解レ多レきレヲレ捕レりレてレ是レ舟レにレ依レて
爰レありレ一レ帯レ一レ山レ不レ入レたレ水レのレ冷レかレるレ足レ先レ切レりレ終レ時レ不レ五レ六
十レ尾レをレ得レりレ又レ久レ刻レまレ小レ島レ數レ多レきレ也レ嘗レてレ鳥レ雀レのレ類レをレカレるレヤ
向レ岸レホレツレのレ浮レりレ是レとレルレベレシレへレとレ云レ々レ小レ海レ岸レユレウレベレツレへレ昔レ越レてレる
次レ目レ行レりレ也レ其レ奥レ不レ先レ程レカレへレテレトレガレニレウレシレをレ又レカレへレりレ扱レ土レ人
等レとレ樺レ皮レとレ剥レてレ丸レ小レ豆レをレ補レ理レ是レをレ曲レてレ筐レとレ是レをレ飯レをレなレす
又レ梳レ篋レ皮レをレ作レりレ其レ管レ亦レ不レ可レ也レ云レ々レ

石料
石料
石料



石狩川頂上の山
 多岐山
 製



石狩川の
 山脈
 多岐山
 製

石山
石山
石山

水の考本々の為に身馴とて結ぶもやをきき杖の那

閏五月朔日曉に涉初陸處也雨樺皮を曲羊を仰り是を被く出
思らくし江初なる反一片の氷を著せんまを踏さるや敷ましく
異域を感或四ことり見らう又望まのよをこりわ必へウレい
小川の岸はあう此を著る本川の兩岸を峨もる未登りて是を立
厚き所行く依り我を是らうへウレの間すらひ大巻糸の巾懸けを
惚らハこととさうまらう岳の良ふらう此を雪路をまきし樹木を
扱し解らうわ歩り去暇取らまをさうさう物り少時又本
川の上をさるまらう断崖なる下を降りて獲るま怪山名は有
らう玉烟噴出く是を向ふは温泉行らう金く土人まらう余は

東面へ連来りしは是を久きまらうの由へはなまらうまらう少外難き
扱らぬまを矢のぬ又七八丁上り岩窟とらあり是を岩をまら中
を威凜然とて痛くまらう焼火く臥り

二日積雪如銀にまらう老一上りり凡一時計まら山凡まらまら旭
れらまら四方一面は霧中へ何れ力まら新山に屈曲する樺木まら
枝を居居まら訓て怪友旅をりね整時らまら霧漸く吹拂く先
方より北の方よりテシホ岳まらチトガニウレユウベツまらまら二ツのまら山を
力まら土人まら何れ山まらまら中をあらまらトコロの山を思ふ
家尖りてまら海の上は突かまら後集又志まらまら頂まら訓りぬ
此後レコ後まら山は五イ鬚松ツツ迦ツツより実まら種まら友らぬ

石山
石山
石山

石部
松本
山崎
石川

霞谷寫



いさよの

山乃山人

あゝせよ

福くも

ゆゑ石乃

まゝ

花野尾



石部
松本
山崎
石川

二十

傍を依て五層の岩より勢を眺望した水烟吹来り乳をくすも海
新しき紅梅面を傾しや映る中紅霞の如く輪を瞬とる方
我々の容も彷彿と瀑布の面は紫金の色に映れ夫人は是を怪し
計と称し余をも我々の人の氣の味をも以て論議す夫人は山雲のふ
とく低頭する候よりふしう余は海をふのチライを此ふまにた海面より
尾の紫金集を現ぬ是を以て海に夫人も我々も是なり又従り
素より海を見別阿波の國權頂の不動の素還と稱し同利行
彼とききうに海面は雲のうら火燭の燃るやう有る人々不動の形と
なる此は異なれ極く夫人の言に任す一葉とも不取に別して
有りゆりの大く置て生きた便を海に及石とあり白濁して不英を

ぬ又少き琥珀と多く拾うる品座と同一然るを白霞と晒すは
切能は為さざる思ふにあは見えは顔松の脂の玉舟を凝りしものり塵
を吸ふことと南の産より入る一は深テシボのうらうらと
十五日宿去未散起て蟻一たる激浪船より打入扱す方おキナを立
所りしうらうらワソカリとて水とて夫人もみんを不辨と稱へたるも
はる安は眩む身なり四とチカへる者一タ方イタイレに帯ぬ
十六日漸る海に早敷を午後トツクは暮れ
十七日曉霧如例出立ソラフチフトより入須更はラホンゲツラレユラマ
ナイと越此邊屋敷あり針俣を辰巳不敷るれと九つとをより
た名道に高山樞木立たりと崖石炭とんとり敷友ナエークラ

石村

雲海
山巖
生雲
黃嶽
不
見
接
石
無
暇



多景志高
石村

古
山
上

大
江
存
概



古
山
上

不
朽
の
志

夕方ゆり来ると瀑布の下より土人等能解を数ナ尾取獲、余福岩よ
嗚々大能を眺せし居れば何れも漸の面閃く物なり刀人定むると
魚の能をよめ其方時を目見閃くとも其方刀人富られり
ては是の時魚りとも知り然もも都令て与増と十度
一度二度三度只鳥羽の味を其方刀人富れり
すは能くと蛙解チライは一丈位をよとて其方刀人富れり
ふ上得と依りし能より上は能と嘉魚似まか魚 能と土嶽の
と我ら鯉の能門はよとを深く怪しと度漸くの時を虚談り
とて成ちる然もも其方丹る家の画やく魚と素麵を喰と
松半優くと物ありと板と能の画と一の奇瀑と成とるる終一丈



草
計

極天地より能多し其の序
を板
白くあつた程に能れ其能れ
と能れし其能れし其能れし

不
朽
の
志

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

沈熙遠曰。天地之氣。各以方殊。而人亦因之。南方山水蘊藉而縈紆。人生其間。得氣之正者。為溫潤和雅。其偏者。則輕佻浮薄。北方山水竒傑而雄厚。人生其間。得氣之正者。為剛健爽直。其偏者。則麤厲強橫。此自然之理也。於是率其性而發為筆墨。遂亦有南北之殊焉。惟能學則咸歸於正。不學則日流於偏。視學之純雜。為優劣。不以宗之南北。分低昂也。余自幼好畫。經歷諸州。而驗之真山水。果如沈子言矣。往者伊勢人。多氣志樓主人。著北蝦

夷餘誌其所載山水奇傑雄厚甚過於余所見者
焉。或曰主人不學畫山水而得南北兩宗之趣何
也。余曰主人產南國。萬里窮朔方。故其所寫能得
真趣。如南北未判之時也。夫畫山水判南北者。官
士文人遊戲耳。養心耳。而寫真則頗有關於闢國
治世之要務者矣。余無官無文。以畫為業。多識南
北山水。特未見蝦夷之山水。一日主人持其所畫
石狩真景及草木器物虫魚稿本。請余淨寫之。余
辭曰。主人之畫已得其真矣。又何以余筆之為。乃

書此語於卷尾。以付主人云。

萬延庚申深秋五顯生辰前三日於東台

南麓水雲山房西窻下

北總鷺湖木雄



單山高常書



人

同治十五年

八月

臘月

乙工

南敷本堂... 共... 三... 人...

三九七

